パトナムの選言説批判とリベラルな自然主義

横山幹子*

Putnam's Criticism against Disjunctivism and Liberal Naturalism

Mikiko YOKOYAMA

抄録

アメリカの哲学者、ヒラリー・パトナムは、2016年 3 月13日に亡くなった。彼は、その哲学的な経歴において、科学的世界観と常識の世界観の両方を受け入れることができる、満足のいく哲学的実在論を求めて、実在論に対する立場を変えてきた。彼は、まず（狭い意味での）形而上学的実在論を、次に内的実在論を、それから、デューイレクチャーにおいて、選言説を含む自然な実在論（常識の実在論）を主張する。しかし、晩年、彼は、依然として常識の実在論を主張する一方で、選言説に反対し、リベラルな自然主義、リベラルな機能主義を主張する。本論文では、選言説への批判に焦点を当て、リベラルな自然主義やリベラルな機能主義の妥当性を検討する。そのため、まず、『心・身体・世界：三つの撚り糸』での自然な実在論と選言説について説明する。次に、リベラルな自然主義とリベラルな機能主義を概観する。それから、選言説への晩年のパトナムの批判を整理する。そして、最後に、リベラルな自然主義とリベラルな機能主義がかなり妥当する考えである一方で、それには、哲学的分析の役割をどのように考えるかという問題（常識は哲学かという問題）も含まれていると論じる。

Abstract

Hilary Putnam, an American philosopher died on March 13, 2016. In his philosophical career, he changes his position towards realism in pursuit of a satisfying philosophical realism, which can accept both the scientific worldview and the commonsense worldview. First, he endorses metaphysical realism (in a narrow sense). Next, he argues for internal realism. Then, in the Dewey Lectures, he advocates natural realism (commonsense realism) involving disjunctivism. But in his later years, while he still endorses commonsense realism, he argues against disjunctivism. And he advocates liberal naturalism and liberal functionalism. This article examines whether liberal naturalism and liberal functionalism are reasonable, focusing on his criticism against disjunctivism. To that end, I will start with an account of natural realism and disjunctivism in "The Threefold Cord: Mind, Body, and World". Next, I will review liberal naturalism and liberal functionalism. Then, I will organize Putnam's objection to disjunctivism in his later years. Finally, I will argue that while liberal naturalism and liberal functionalism is fairly reasonable, there is a problem with the role of philosophical analysis (common sense =philosophy?) in it.

＊筑波大学図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and Media Science
University of Tsukuba

1．はじめに

「形而上学、認識論、心の哲学、言語の哲学、科学の哲学、数学の哲学、論理学の哲学に大きな寄与をしたアメリカの指導的な哲学者」である Hilary Putnam は、2016年3月13日に、亡くなった[1]。

Putnam は、実在についての立場をたびたび変えてきた哲学者として有名である。私自身かつて、「知識と実在論：パトナムの場合」(2003)[2]で、次のように述べている。「論理実証主義の立場から出発したパトナムは、彼の実在論に対する考えを何度か変化させている。初期に形而上学的実在論の立場をとっていた彼は、1970年代後半から80年代初めに、内的実在論と呼ばれる立場に転向する。そして、1990年代には、その内的実在論の立場から自然な実在論の立場に変わる。本論文で主に取り扱うデューイレクチャーは、彼が自然な実在論をはっきりと表明しているものである。以下では、形而上学的実在論から内的実在論へ、内的実在論から自然な実在論へと移って行ったパトナムの実在論をめぐる立場の変遷を扱うことになる。」[3]

たとえ後に Putnam が形而上学的実在論を二種類に分けかつての意味とは異なる意味で自分自身が形而上学的実在論者であると考えていたとしても、(狭い意味での)形而上学的実在論、内的実在論、自然な実在論(常識の実在論)と、実在論に対する態度を変えてきたことを、彼自身認めていた[4]。ただし、混同されてはいけない実在論がもう一つある。それは、科学の説明の中にある、観察できない理論的実在についての科学的実在論である。Putnam 自身、その自伝(2009)において、「私は自分を**常に**科学的実在論者であると見なしてきた」[5]と言っている。また、"Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism"の序論(2012)[6]で、De Caro と Macarthur は、「実際、Putnam の科学的実在論へのコミットメントは、彼の有名な内的実在論者の時期の、前も、間も、後も、常にあり続けた」[7]と述べている。Putnam は、実在論に対する態度をさまざまに変えてきている一方で、科学的世界観を拒否してはこなかったのである。

科学的世界観を拒否してこなかった Putnam が、実在についての立場を変えながら目指したものは、"Naturalism, Realism, and Normativity"の序論(2016)[8]における De Caro によれば、「(1)科学的世界観の蓋然的で改定可能な正しさ**と**(2)常識の世界観の蓋然的で改定可能な正しさを同時に受け入れることのできるような実在論」[9]、科学に対する反実在論を伴わない常識の実在論であった。

第一部の原型がデューイレクチャー(1994)であり、第二部の原型がロイスレクチャー(1997)[10]である"The Threefold Cord: Mind, Body, and World"(1999)[11]では、Putnam は、外的対象とわれわれの知覚作用の間にインターフェース(たとえば、センスデータのような内的な媒介物)を考えないという知覚の選言説を含む形での、自然な実在論を主張することによって、科学的世界観と常識の世界観の両立が可能だと考えていた。しかし、晩年の自伝(2009)では、彼は、「現れ」を脳状態や出来事と同一視する可能性に反対してはいない。彼は、常識の実在論を目指しながら、知覚の選言説を否定するようになる。そして、彼が、科学的世界観と常識の世界観の両立のために提出してきた新たな概念は、「リベラルな自然主義」、「リベラルな機能主義」[12]である。

Putnam の思想に関しては、"Reading Putnam"(1994)[13]等、多くの研究がある。わが国でも、たとえば、その実在論に関係するものとしては、竹尾治一郎の「パトナムの実在論」(1981)[14]・松本俊吉の「ヒラリー・パトナムの「内的実在論」についての一考察」(2000)[15]・中村正利の「大切なものは目に見えないか?- パトナムの形而上学的実在論批判」(2000)[16]・大谷弘の「パトナムの自然な実在論とは何か」(2004)[17]等があるし、私自身、「「自然な実在論」について」(1996)[18]・「知識と実在論：パトナムの場合」(2003)・「合理的受容可能性と真理」(2007)[19]等で Putnam の思想について論じてきた。しかし、それらの多くは、私自身のものも含めて、実在論に関して言えば、初期の形而上学的実在論やその後の内的実在論、自然な実在論等に関するものであり、2000年代後半以降の Putnam の主張を考察しているものはまだ少ない。

本論文の目的は、2000年代後半以降の Putnam の主張に焦点を当て、選言説を否定するための Putnam の議論の適切さを検討することによって、選言説を否定する「リベラルな自然主義」、「リベラルな機能主義」という考えの妥当性について考察することである。そのために、まず、"The Threefold Cord: Mind, Body, and World"(1999)での「自然な実在論」(選言説を肯定するもの)がどのような考えであったか、そしてそこで主張されていた選言説とはどのようなものであったかを確認する。次に、Putnam による二種類の形而上学的実在論がどのようなものかを明らかにした上で、広い意味での形而上学的実在論者であるためにとられるべきだと考えられている「リベラルな機能主義」や「リベラルな自然主義」がどのようなものかを説明する。そして、その立場からの選

言説批判がどのようになされているのかを概観する。それから、そこでの選言説批判の妥当性について検討し、科学的世界観と常識の世界観の両立をめざすもの（科学的世界観と常識の世界観の両方を受け入れることのできるもの）としての「リベラルな自然主義」、「リベラルな機能主義」という考えの有用性について考察する。

2．知覚の選言説を含む「自然な実在論」

本章では、“The Threefold Cord: Mind, Body, and World”（1999）における「自然な実在論」の主張がどのようなものであったか、そして、どのような理由で、知覚の選言説が擁護されていたかを確認する。

そこでは、Putnam は、「私が信じるように、形而上学的な空想に後退することなく、われわれの知識の主張は実在に対して責任を持っているというわれわれの感覚を正当に評価することができる道があるなら、そのときは、われわれがその道を見つけることが重要である」[20]と述べ、「反動的な形而上学と無責任な相対主義の中間の道」[21]を探そうとしている。そして、そのような道として彼が提案したのが、自然な実在論（常識の実在論）なのである。

私は、その考えについて、「「自然な実在論」について」（1996）や「知識と実在論：Putnam の場合」（2003）、「合理的受容可能性と真理」（2007）等でまとめている。

> パトナムは、デューイレクチャーで、自然な実在論、常識の実在論を主張している。彼によれば、外的対象をわれわれが知覚する際に何らかのインターフェースを考え、われわれが直接知覚するのは外的対象ではなくその知覚的な経験であるとしながらも、知覚の到達できない外的対象の存在を想定することが、形而上学的実在論の問題点である。そのように考えるために、何らかの魔法の力を想定しなければ、外的対象についての真理をわれわれが知ることができなくなるのである。したがって、そのような考えを捨て、われわれの知覚作用の対象は外的なものであると考えるべきだというのが、彼の主張である。[22]

つまり、自然な実在論では、外的対象を知覚する際にわれわれが直接知覚しているのは、インターフェースではなく、外的な対象であり、「成功した知覚とは、『外にある』実在の諸側面を**感じること（sensing）**であり、それらの諸側面によってある人の主観性に引き起こされた単なる影響ではない」[23]のである。

そのようなインターフェース（それは、最高の共通要素（highest common factor）、HCF とも呼ばれる）を捨てることは、知覚の選言説の特徴である。“The Threefold Cord: Mind, Body, and World”（1999）における Putnam は、知覚の選言説に共感していた。

Putnam は、インターフェースを認める議論について、次のように言っている。

> そのもっとも単純な形では、その議論は次のことを主張する。つまり、もし私が二つの場合に、たとえば、「壁がバラで覆われているのを見ている」というような「同じ経験を持っている」が、それらのうちの一つの場合には、私が知覚していると思っているものを（たとえば夢を見ているなどの理由で）実際には知覚していないとしても、そのときでも、まだ、二つの場合にはまったく文字通り**共通の何らかのもの**（いわば、「最高の共通要素」）があり、その**共通の何らかのもの**は外的なものではありえず（なぜならわれわれは二つの場合の一つにおいて仮定としてそのことを排除したから）、その結果私が経験しているのは内的なものでなければならないということを主張する。この内的なものを、われわれは、「表象」と呼ぶこともできるし、また、われわれはそれを古い言葉で**現れ**と呼ぶこともできるし、ラッセルやムーアが非常に一般化した言葉で**センスデータ**と呼ぶこともできる。[24]

つまり、そのような議論では、真正な知覚と真正でない知覚（幻覚や錯覚）が共通に持つものを考え、真正でない知覚の場合は、経験されるものは外的ではありえないから、両方が共通に経験するのは、内的な対象（インターフェース）であると考えるのである。そのうえ、それが説明に使われるためには、あるインターフェースが別のインターフェースと同じであるということは、「**相互に排他的な状態の集合の同じメンバーの中に入るということ**」[25]でなければならず、したがって、それは、推移性が成り立つような同一という関係（A＝B、B＝C ならば A＝C のような関係が成り立つような同一性）を満たすものでなければならない。

しかし、“The Threefold Cord: Mind, Body, and World”（1999）では、Putnam は、そのようなインターフェースを認めることを否定していた。インターフェースを認めることなく、幻覚や錯覚を説明するものとして、知覚の選言説を考えていたのである。Putnam は、次のように言っている。

両方の場合（知覚と幻覚等）に、私が「私は壁がバラで覆われているのを見た」と記述したというとき、私が推論してよいのは以下の選言が真であるということだけである。(D) **私は壁がバラで覆われているのを実際に見たか、壁がバラで覆われているのを見たかのように私には見えた（seemed）のかのどちらかである。**[26]

同じ記述が使われているからといって、同じ対象があるとしなければならないわけではない。その記述を、二つの文の選言とみなすことができるのである。

ここで、Putnam がインターフェースを捨てるために論じている二つの議論を整理しておくことは役に立つ。一つは、有名な推移性に関する議論である。“The Threefold Cord: Mind, Body, and World”（1999）の中で、彼は、「現れ」における区別不可能性は、HCF 議論が求めるような推移的な関係ではないということを述べるために、「白のペンキに赤のペンキを一滴ずつ入れていく」という思考実験[27]をしている。彼によれば、白のペンキに一滴の赤のペンキを入れた場合のピンクを塗ったカードと二滴の赤のペンキを入れた場合のピンクを塗ったカードを、われわれは区別できない。けれども、一滴の赤のペンキを入れた場合のピンクを塗ったカードと二十滴の赤のペンキを入れた場合のピンクを塗ったカードは区別できる。したがって、この場合、推移性は成り立っていない。インターフェースを脳の状態と考えるならば、同一性が推移的な関係だからこそ、同じインターフェースが複数の場所に起こっている同じ知覚作用が起こっていると言うことができる。にもかかわらず、「現れ」の区別不可能性に関しては、推移性をみたすような同一性は成り立っていないと言うのである。

もう一つは、同一性についての議論[28]である。そこでは、インターフェースと脳状態が同一だと考えるときの同一性の候補として、理論的同定という意味での同一性が考えられている。それは、光はある種の電磁放射であるという場合の同一性である。その理論的同定という考えには、前科学的概念を物理学に還元できる（言い換えることができる）という考えが伴っている。その場合は、物理学に還元される概念を含む科学の法則の蓋然的真理は、物理学というより基礎的な科学の法則から導出可能だと示されなければならない。たとえば、光を電磁放射に還元する場合、影、反射などを使った話も還元されなければならない。つまり、感覚が何らかのより基礎的な科学に還元されるなら、感覚に関する話に出てくる複数の概念もその科学に還元されなければならない。しかし、それは難しいというのである。

そのようにして、Putnam は、インターフェースを脳状態と考えたときもうまくいかないと主張し、インターフェースを捨てる選言説を主張するのである。

3．形而上学的実在論

前章で確認したように、“The Threefold Cord: Mind, Body, and World”（1999）における Putnam は、形而上学的実在論を否定し、形而上学的ファンタジーと無責任な相対主義から逃れる道として、自然な実在論を主張していた。しかし、先にも述べたように、彼は、晩年、自分はかつて自分が否定したものと異なる意味で形而上学的実在論者であると言っている。そして、そこで彼が主張している形而上学的実在論は、科学に対する反実在論を伴わない常識の実在論の一部であると考えられている。そして、彼は、そのような常識の実在論を守るために、自然な実在論を洗練されたものにするために、「リベラルな自然主義」、「リベラルな機能主義」という考えを主張するのである。“Perception without Sense Data”（2012）[29]で、彼は、「その（リベラルな機能主義の）目的は、その言葉の最上の意味で形而上学的である」[30]と述べている。それゆえ、「リベラルな自然主義」、「リベラルな機能主義」という考えがどのようなものであるかを概観する前に、本章では、彼の形而上学的実在論についての考えを見ておきたい。

Putnam が分けている二つの形而上学的実在論は、内的実在論（真理を十分によい認識的状況の下で保証されることと同一視する検証主義的な立場）のアンチテーゼとなっていた「形而上学的実在論」と、晩年の Putnam も認めていると言っている、広い意味での形而上学的実在論である。まず、内的実在論のアンチテーゼとしての「形而上学的実在論」で、彼が何を考えているのかを見てみたい。“On Not Writing Off Scientific Realism”（2010）[31]で、彼は、次のように述べている。

それでは、私は、私の古い時代の形而上学的実在論者になったのか。イエスでもありノーでもある。私が「形而上学的実在論」を説明していたとき、結局考えられていたものは、（1）検証主義の拒否と、（2）概念相対性（conceptual relativity）の否定の連言だった。私は検証主義の拒絶は正しかったが、概念相対性の否定は正しくなかったと思っている。私の「形而上学的実在論者」は、記述が完全で正しいなら、所与の事物や事物の体系が正確に一つのやり方で記述で

きると信じており、そのやり方が、それらの語のクワイン的な意味で、一つの「存在論」と一つの「イデオロギー」を正確に決定する、つまり、個物の一つの領域とそれらの個物の述語の一つの集合を正確に決定すると信じている。[32]

ここで言われている概念相対性とは、理論は意図された解釈だけでなく、意図されなかった解釈をも持ちうる、言語も意図された指示関係（語と外的対象の指示関係）だけでなく、無限に多くの指示関係を持ちうるという考えである。そのように、彼によれば、真理とは検証されるということであるという検証主義と概念相対性の両方を否定し、一つの決まったやり方で実在を正確に記述できると考えるものが、内的実在論のアンチテーゼとしての「形而上学的実在論」なのである。

“Naturalism, Realism, and Normativity”（2015）[33]においても、Putnam は、自分は、かつて、「形而上学的実在論」という言葉を「その主な主張が、世界が（心から独立した）対象と性質に正確に一つのやり方で分けられることができるという主張である、特定の立場のための術語」[34]として使ったが、それは間違いだったと述べている。そして、その意味での「形而上学的実在論」を否定することによって、すべての形而上学的実在論を拒否していると言っていたことも間違いだったとし、自分が、そのようなテクニカルな意味でない形而上学的実在論者であるとする。

では、広い意味での形而上学的実在論とはどのようなものだろうか。“Perception without Sense Data”（2012）において、Putnam は、われわれの心的な働きや信念や概念から独立した現実の世界があること、その世界についての真理が検証可能性を超えているということを信じているならば、形而上学的実在論者であるとしている。そして、彼によれば、そのような形而上学的実在論者は、概念相対性と呼ばれる現象を否定する必要はない。同じ状態の異なる表現という考えは、形而上学的実在論者にとっては問題ではないのである。そして彼は、「人は概念相対性の可能性を受け入れ、かつ同時に、内的実在論を拒否することができる」[35]と言うのである。つまり、先の引用で「私の古い時代の形而上学的実在論者になったのか」という質問に対して「イエスでもありノーでもある」と答えているのは、検証主義を否定する点においてイエスであるが、概念相対性を認めている点においてノーであるということを意味していることになる。

“From Quantum Mechanics to Ethics and Back Again”（2012）[36]や自伝（2009）で、Putnam は、正確に一つの方法で世界を記述できると考える、内的実在論へのアンチテーゼとしての「形而上学的実在論」は、形而上学的実在論がとりうる一つの形式に過ぎないとした上で、

しかし、もしわれわれが「形而上学的実在論」を、もっと広く、すべての形の検証主義と、われわれが世界を「作ること」についてのすべての語りを拒絶する哲学者すべてに当てはまるものとして理解するならば、そのときは、私は、**その**意味で形而上学的実在論者であることは完全に可能であり、私が「概念相対性」と呼んでいる現象を完全に受け入れることができると信じている。[37]

と述べているのである。

4．リベラルな自然主義

“Naturalism, Realism, and Normativity”の序論（2016）において、De Caro は、科学的自然主義と常識の実在論の和解の形が、Putnam にとっては、「リベラルな自然主義」だとしていた。そして、De Caro によれば、そのような自然主義は、科学的な世界観に還元できない要素をすべて拒絶するものではない。

De Caro は、Putnam にとっての「リベラルな自然主義」が含むべき重要な特徴のリスト[38]を挙げている。それらは、次のようなものである。リベラルな自然主義が科学的実在論と矛盾しない。複数主義をとる。科学に関しても常識に関しても可謬主義である。数学的言明や倫理的言明のような対象に基づかない客観的知識も認める。常識の世界観と科学的世界観の矛盾を解決する。超自然的な想定をしない。哲学には科学的な側面と道徳的な側面がありどちらも本質的である。常識的な世界観は科学から正当化される必要はない。世界が物理学によって完全に記述されることができない。実在の異なるレベルにおいて付随性の関係を想定する。和解問題のためには因果という観念が検討されるべきである。

上記のような整理に基づくならば、科学に対する反実在論を伴わない、科学的世界観と常識の世界観の両方を受け入れることができるような、科学的自然主義と常識の実在論の和解をめざす「リベラルな自然主義」について、Putnam が何を述べているかが重要になる。それゆえ、彼が“Naturalism, Realism, and Normativity”（2015）で「リベラルな自然主義」についてどのように言っているかを見てみたい。

Putnam は、そこで、自分がリベラルな自然主義者で

あるとしている。では、リベラルな自然主義で、何が意味されているのだろうか。彼によれば、それは、「哲学における超自然的な実体にアピールするすべてのものを拒絶するという意味での自然主義」[39]である。しかし、その自然主義は、美学や倫理学の概念をも含むすべての概念を自然科学の概念に還元しなければならないと考えているわけではない。その立場では、自然科学の概念に還元できないということが、非自然的、超自然的ということを意味するのではない。リベラルな自然主義は、たとえば、常識や心理学において表象という観念を使って物事を説明し、その表象という観念が何らかの物理的なものに還元できないとしても、そこには、非自然的なものや、超自然的なものはないと考えるのである。そのように、リベラルな自然主義とは、非還元主義的な自然主義のことであると考えられる。

その一方で、Putnam は、「たとえ私が実際にリベラルな自然主義者であるとしても、そのラベルは、私の哲学における多くのことを言っているわけではない」[40]と言っている。リベラルな自然主義者の概観は、リベラルな自然主義が、形而上学的実在論に関してはどのように働くか、規範的実在論に関してはどのように働くかを見ることによって明らかになるというのである。

そのように考えるならば、リベラルな自然主義とは、問題を考える上での視点であると考えられる。つまり、自然主義の立場をとる一方で還元主義を採用しない視点である。リベラルな自然主義的に心の問題を考えるならば、それはリベラルな機能主義的に心を考えることに通じる。つまり、心を計算的な機能に還元せずに、もっと広い意味で機能を捉え、心を広い意味での機能主義的に考えるのが、リベラルな機能主義である。そして、Putnam によれば、心についてリベラルな機能主義をとるならば、広い意味での形而上学的実在論を主張し、科学的世界観と常識の世界観の両方を受け入れることのできる、常識の実在論を主張できるのである。

5．リベラルな機能主義

では、自然主義の立場をとる一方で還元主義を採用しないリベラルな機能主義とはどのようなものなのだろうか。そして、それは、Putnam が初期に主張していた機能主義とどのように違い、リベラルな機能主義をとることによって、どうして、広い意味での形而上学的実在論を主張し、科学に対する反実在論を伴わない常識の実在論を主張することができるのだろうか。

“Corresponding with Reality”（2011）[41]において、Putnam は、リベラルな機能主義を主張している。ここでは、“Corresponding with Reality”（2011）での彼の主張に沿って、“Functionalism: Cognitive Science or Science Fiction?”（1997）[42]（かつての機能主義について）、“Sensation and Apperception”（2012）[43]、“Perception without Sense Data”（2012）、“Replay to John McDowell”（2015）[44]、“ “Naïve Realism” and Qualia”（2016）[45]をも参照しながら、「リベラルな機能主義」とはどのような考えなのかを概観したい。ただし、論は、特に言及がない場合は、“Corresponding with Reality”（2011）によっている。

Putnam は、機能主義を主張している。しかし、そこで彼自身が言っているように、その機能主義は、彼自身が以前主張していた機能主義とは異なる。それゆえ、彼は、まず、自分がかつてどのような機能主義を主張していたか、どのような理由でそれを捨てたかに言及したうえで、現在正しいと思っている機能主義はどのようなものかについて述べるのである。

Putnam によれば、1960年ごろ考えていた機能主義は、「（知的能力を持ったロボットがいるとするなら）ロボットと人間の両方の脳は、コンピュータとして記述されることができる」[46]というものだった。当時は、脳の論理的状態もコンピュータのプログラムによって記述される状態と同じだと考えており、ロボットの脳と人間の脳が同じプログラムを持っているなら、人間とロボットは同じ心理状態を持つと考えていた。そして、“Functionalism: Cognitive Science or Science Fiction?”（1997）によれば、それは、「心理学的状態は機能的状態と経験的に同値である」[47]という経験的仮説だったのであり、彼は、チューリングマシンがそのモデルにはなりえないと気づいた後も、心理学はそのモデルを与えることができると考えていたというのである。

しかし、Putnam は、そのような機能主義を捨てることになる。彼によれば、“The Meaning of “Meaning””（1975）[48]での外在主義的、反個人主義的意味論は、上記のような機能主義とは相容れなかったため、彼は、それをサイエンスフィクションとして捨てたのである。

しかし、そのような初期の「機能主義」（これからは区別するため、「」をつける）とは異なる機能主義があると Putnam は言う。彼によれば、機能主義とは、心的活動や能力を、機能の仕方と同一視し、それらの機能の仕方が異なる物理システムにおいて現実化されうるとする考えであり、「機能主義」のように、機能を計算的な機能と考えるものだけではない。彼は、そのような機能主義をリベラルな機能主義と呼ぶ。リベラルな機能主義は、非還元主義の立場をとる。そして、有機体の機能

の中にはすでに環境が含まれている。機能は脳の内部だけで内的に解決するのではない。それは、脳の内部だけでなく環境の要素も取り込んでいるという意味で、「長い腕（long arm）」を持っている。有機体は相互作用的（transactional）なものである。

“Perception without Sense Data”（2012）でも、Putnamは、リベラルな機能主義について同様のことを述べている。広い意味での機能主義は、「機能主義」と同様に、心の問題を考えるとき、有機体の様々な機能に注目すべきだと考えるが、感覚受容器と脳からの運動器官への信号だけに着目し、機能をコンピュータプログラムに還元できるとは考えない。環境の要素も取り込んだ「長い腕」を持つ機能主義である。そして、彼によれば、そのようなリベラルな機能主義は、知覚についての新しいモデルを示すものではない。それは、さまざまなレベルで知覚について考える方法を示すものである。そのような機能を考えるためには、知覚心理学や発達生物学、神経科学、行動科学等のさまざまな科学的探究と哲学的分析は協力する必要があるのである。

Putnamによれば、そのような広い意味での機能主義を考えるならば、私の環境にある対象や起こっていることを私と結びつけることができる。彼は、次のように言っている。

> リベラルな機能主義者たちが物事を見るとき、普通の条件の下では、われわれの知覚的経験も、われわれが受け入れる文も、知覚的信念を形成する過程の始まり**ではない**。始まりは、われわれの頭の外にある。テーブルの上にノートパッドがあるという主旨の知覚的判断を形成する過程は、事実、ある「機能」の実行である。[49]

もちろん、ここでの「機能」は広い意味での機能であり、そのように考えることによって、私の経験は内容を持つことができるのである。

同様の考えは、機能的役割を非還元的に探究することがリベラルな機能主義だと述べている“Sensation and Apperception”（2012）や“Replay to John McDowell”（2015）の中でも見られる。後者では、「統覚（apperception）、言い換えるならば、何らかのものに気付くことは、物理化学の『状態』でもなければ、計算的な『状態』でもない。それは、人間や人間の言語的環境、非言語的環境、広い意味での『機能的』状態を含む志向的な相互作用（transaction）である」[50]と言われている。外的世界への認識的アクセスを認めるためには、意味論的外在主義（語の意味は心的対象ではなく、外的な実在に到達するものという考え）を認め、非還元主義的な種類の機能主義を考えなければならないのである。

ただし、リベラルな機能主義は、統覚だけを認めるものではない。““Naïve Realism” and Qualia”（2016）で、Putnamは、統覚は、長い腕を持って環境の中で機能し、知覚の始まりは外にあり、「周りの環境についての信念は、話し手の外在主義者的に同定された機能的な状態により世界の可能な状態と結びつけられることによって、内容を持つ」[51]と言っている一方で、リベラルな機能主義は、すべての知覚的経験が統覚だということに反対するとも言っている。そのことは、彼の選言説批判に結びつく。それゆえ、次に、かつて彼が共感していた知覚の選言説についての晩年の考えと、彼が知覚の選言説を否定するにいたった理由を見ていきたい。

6．選言説批判

6.1　選言説に対する積極的な批判

晩年のPutnamは、選言説に対してどのように考えているのだろうか。“How to Be a Sophisticated “Naïve Realist””（2011）[52]や“Perception without Sense Data”（2012）における論を中心に、晩年の彼の選言説についての考えを見てみたい。

“How to Be a Sophisticated “Naïve Realist””（2011）では、Putnamは、真正な知覚の対象は、われわれが自分たちの環境で見ている対象であり、対象との間に、インターフェース（センスデータや志向的内容）があるのではないと考えるのが、選言説であるとする。選言説論者によれば、われわれが知覚している質は対象の質である。そして、彼によれば、選言説論者は、真正な視覚的経験の場合、対象の知覚された公共の質（public qualities）[53]の記述が経験の質的な特徴（現象的特徴）を尽くしていると考えている。

Putnamによれば、知覚の選言説論者は、インターフェースを認め、それを非表象的だと考える現象説論者とは異なる。現象説論者によれば、知覚している人の持つ、たとえば緑の杭のフェンスの色のクオリアはそのフェンスの色そのものと同一視されない。つまり、現象説論者は、知覚された公共の質の記述が経験の現象的特徴を尽くしているとは考えない。また、選言説論者は、壁の知覚の内容は、壁を表象していると考える志向説論者（表象説論者）とも異なる。志向説論者によれば、われわれが直接気づいているのは志向的内容であって、壁自体ではない。志向説論者は、知覚された公共の質の記

述が経験の現象的特徴を尽くしているという考えを選言説論者と共有しているが、選言説論者が否定するインターフェースとしての志向的内容を認めている。

まとめると、選言説とは、インターフェースを否定し、公共の質の記述が経験の現象的特徴を尽くしていると考えるものであり、現象説とは、インターフェースを認め、公共の質の記述が経験の現象的特徴を尽くしているとは考えないものであり、志向説とは、インターフェースを認め、公共の質の記述が経験の現象的特徴を尽くしていると考えるものである。

そのようにインターフェースを否定する選言説論者は、真正な知覚的経験と幻覚が共通のものを持っていることも否定する。選言説論者によれば、真正な知覚と幻覚を区別できないとしても、それは、両者が共通のものを持っているからではない。マクベスがダガーの幻覚を見ているときに、ダガーの真正な知覚と同じものを知覚しているわけではないのである。しかし、Putnamによれば、選言説論者のこの主張には、はっきりとした根拠はない。「選言説論者は、経験の**現象的**性質と脳状態や脳の出来事を同一視する**科学的な**理由はありえないと単に想定しているだけ」[54]なのである。そのうえ、彼によれば、選言説論者は、たとえ彼らが現象的性質と脳状態や脳の出来事を同一視することを否定し、インターフェースを考えることによって真正な知覚と幻覚の区別不可能性を説明することを否定するとしても、「現象的特徴の内的な神経心理学的状態への付随性」を認めている。なぜなら、彼らは、真正な知覚的経験の場合と完全な幻覚の場合に脳内に生じる何らかのものがあることは認めているからである。しかし、選言説論者は、真正な知覚的経験の場合の「現象的特徴の外的性質への付随性」も認めている。なぜなら、選言説論者は、真正な知覚的経験の現象的特徴は外的性質によって決定されると考えているからである。

Putnamは、Blockの逆転地球の思考実験[55]を考えるならば、その両方の付随性を同時に認めることには緊張があると言う。Blockの思考実験によれば、逆転地球上では、空が黄色で、草が赤いというように、すべてのものの色は、地球上の色の補色である。そして、「空は何色ですか」と問われたら「青」と答えるように、逆転地球上の居住者の語彙も地球上と逆転している。ある地球人が、知らない間に逆転レンズをつけられて逆転地球に移動させられる。その人は逆転レンズをつけているので何の違いも気づかない。たとえば、黄色い空（逆転地球上の空）は、その人には青く見える。その場合、その人の心的状態は、地球上の場合と変わらない。そのような思考実験を受けて、Putnamは、地球上の色と逆転地球上の色は異なっているのに、どちらにも同じ脳状態が対応しているという想定のもとでは、脳状態が現象的特徴（質的特徴）を決定するという考えは、矛盾すると言うのである。

Putnamによれば、問題は「現象の外的性質への付随性」を認めることにある。つまり、公共の質についての記述がその経験の現象的特徴を尽くしているという主張にある。その主張は正しくない。なぜなら、たとえば、普通の視覚を持つ人と乱視の人では同じ対象が異なる見えを持ったり、白い表面を見るとき左目を閉じて見るときと右目を閉じて見るときでは少し違った見えであったりするように、その主張にはたくさんの反例があるからである。そして、両者を認めることの矛盾は、公共の質についての記述がその経験の現象的特徴を尽くしていると考えずに、われわれが知覚する性質はわれわれ自身と環境との間の相互作用に依存していると考えることによって解決されるのである。

さらに、Putnamによれば、選言説論者が懐疑論を避けるためにインターフェースを拒否しようとしていることにも問題がある[56]。しかし、彼によれば、懐疑論に答えるために選言説論者になる必要はない。知覚についての機能的な説明をしていくことによって、つまり、リベラルな機能主義によって、懐疑論的な心配に答えていくことができるのである。その立場では、幻覚は、脳の状態だけで説明できるのではなく、その有機体の機能的に特徴づけられた状態なのである。そして、リベラルな機能主義では、真正な知覚的経験に現れている質は、実在の性質であると言うことに同意し、幻覚における質は、実在の性質ではないとするのである。

“Perception without Sense Data”（2012）で、Putnamは、「結局、私は、科学的に探求されることのできる質的で非概念的な経験の領域があると信じている」[57]と言っている。適切な客観的色を持つ対象なしに、色を知覚しているときも、その経験の質的な次元に注意を向けることができるのである。懐疑論を拒否しようとして、つまり、われわれは知識を得ることができるという常識的な考えを擁護しようとしてとられた選言説は、われわれの常識とは離れたものになる。われわれが経験している現象や神経科学的な学問の成果を見るならば、クオリアを一切認めないことは、常識的ではない。

6.2 “The Threefold Cord: Mind, Body, and World”（1999）での議論に対する批判

前節で見たように、Putnamは、選言説を否定するに

至った。しかし、“The Threefold Cord: Mind, Body, and World”（1999）で彼は、「現れ」というインターフェースを否定する議論をしていたのではなかったか。晩年、彼は、自伝（2009）の中で当時の議論は間違っていたと論じている。本章では、彼がどのような理由で当時の議論は間違っていたと論じているのかを概観したい。

自伝（2009）で Putnam が問題だったと言っているのは、「現れ」を脳状態や脳の出来事と同一視する可能性に反対する議論である。そして、彼は、その問題を説明するために、「現れ」の二つの意味、「知覚されるものの性質」としての現れと、「現象的特徴によってのみ同定されるもの」としての現れを区別し、現れと脳状態の同一性の可能性を論じていたときの「現れ」は後者の意味の現れだったと言う。そして、そのような「現れ」と脳状態の同一性がありえないとしていた過去の自分の二つの議論、第二章の終わりで確認した議論に反論している。

まず、推移性に関する議論への反論から見て見たい。Putnam によれば、その議論は、「その意味での『現れ』が、主観的な区別可能性によって同定され、区別不可能性は、**推移的**ではないということだった」[58]。しかし、彼によれば、「それが実際に示しているのは、所与の感覚がそれと同一である脳状態の**厳密な**集合はないということだけである」[59]。そして、厳密な集合がないということは、同一理論を排除するためには十分ではない。なぜなら、それを認めるなら、「光」と他の種類の放射の境界線があいまいなので、光が電磁放射であるという理論も排除しなければならなくなるからである。物理学の理論の多くは、「あいまいな境界の同一性」を使っているのである。彼によれば、そのような同一性を理論に求めることが間違っているのである。

次に、理論的同一性に関する議論への反論についてである。Putnam は、より基礎的な科学に還元される概念を含む科学の法則の蓋然的真理は、そのより基礎的な科学の法則から導出可能だと示されなければならないという考えは間違っていると言う。「たとえ理論的同一性についてのこの考えが、視覚を電磁気理論に還元するような古典的場合に確かに当てはまるとしても、そして、物理学に似たようなケースが大変少ない数ではあるがあるとしても、**すべての**理論的同一化がそのような強い要求を満足しなければならないと主張することは、考えられないように私には今思える」[60]と言うのである。科学主義者は、たとえば、最上の説明のための推論として、厳密な法則を知ることなしに、同一性について論じる。

Putnam によれば、上記二つの議論では、感覚が脳の状態、もしくは、脳の出来事と同一であると考えることに反対する根拠にはならないのである。

7．考察

今まで見てきたように、晩年、Putnam は、選言説を否定し、科学に対する反実在論を伴わない常識の実在論を目指していた。ここでは、彼の選言説批判が適切なのか、選言説を伴わない形での常識の実在論を支えるものとしての「リベラルな自然主義」、「リベラルな機能主義」という考えにはどのような意味があり、どのような問題を含みうるかについて考察したい。

最初に、Putnam の選言説批判の適切さについて考える。まず、“The Threefold Cord: Mind, Body, and World”（1999）での選言説を擁護する主張の誤りとして彼が論じていることが適切かどうかである。彼は、「現れ」の二つの意味、「知覚されるものの性質」としての「現れ」と、「現象的特徴によってのみ同定されるもの」としての「現れ」を区別したうえで、後者の意味での「現れ」と脳状態の同一性がありえないとしていた過去の自分の二つの議論、推移性に関する議論と理論的同一性に関する議論を批判していたのであった。

Putnam によれば、推移性の議論が主張していたのは、ある「現れ」に対応する厳密な脳状態の集合が見つけられないから、「現れ」は脳状態と同じではなく、脳状態は認められるべきインターフェースにはならないということだった。しかし、晩年の彼は、厳密な集合がないということは、同一理論を排除するためには十分ではないと言っていた。また、理論的同一性に関する議論が主張していたのは、理論的同一性が満たされるためには、より基礎的な科学に還元される概念を含む科学の法則の蓋然的真理は、そのより基礎的な科学の法則から導出可能だと示されるべきだが、脳状態と「現れ」に関してはそのような理論的同一性は考えられないので、脳状態は認められるべきインターフェースにはならないという考えだった。しかし、これもまた、晩年の彼によれば、間違っていた。厳密な法則を知ることなしに、同一性について論じることができると言っていたのである。

私は、このことを述べるために、Putnam が挙げている根拠、すなわち、自然科学の実践においてさえ「あいまいな境界の同一性」を使っているし、最上の説明のための推論として、厳密な法則を知ることなしに、同一性について論じているという根拠は、もっともだと考える。もし理論において、「あいまいな境界」を認めず、厳密な法則が知られなければ、推論できないとするならば、たとえば、最上の説明のための推論が、厳密ではないか

ら使えないということになるならば、われわれは、世界や物事についての多くの分析を放棄しなければならなくなるだろう。

われわれが物事を理論的に整理して理解しようとするとき、われわれは何らかの抽象的な操作を行っている。しかし、その抽象的な操作を行っているときの概念が適用される範囲が、厳密に確定されているわけではなく、厳密に確定されていなくとも、われわれは、その理論を使って、物事をよりよく理解することができている。それは自然科学に限らない。たとえば、記号表現を、記号表現とそれによって指示されるものの間に類似性という関連があるものとしての「イコン」、記号表現とそれによって指示されるものの間に近接性という関係があるものとしての「インデックス」、記号表現とそれによって指示されるものの間にコードによる結びつきがあるだけのものとしての「シンボル」に分けて、われわれのコミュニケーションを分析しようしたりする[61]。しかし、そこでの抽象的な操作で分類された概念は、その適用範囲に関して厳密な境界線があるわけではない。象形文字である漢字は、「イコン」なのだろうか、それとも「シンボル」なのだろうか。しかし、そのように、厳密な境界線がないからといって、分析ができないわけでも、その分析によって得られた結果が無意味になるわけでもない。そのように考えるならば、Putnam による推移性に関する議論と理論的同一性に関する議論の批判は、妥当なものだと考えられるのである。

では、Putnam が選言説を批判するために提出していた積極的な根拠に関してはどうだろうか。彼が選言説を否定していた論拠は、三つに整理することができる。一つ目は、選言説論者は、経験の現象的特徴と脳状態や脳の出来事を同一視する科学的な理由はないと単に想定しているだけであるというものだった。二つ目は、公共の質についての記述がその経験の現象的特徴を尽くしているという主張、つまり、「現象の外的性質への付随性」には、日常生活においても、いくつもの反例があり、その主張は正しくないというものだった。そして、三つ目は、選言説は懐疑論を退けるために提出されているが、それは、懐疑論を退けるための唯一の方法ではないということだった。そのうえ、われわれが経験している現象や神経科学的な学問の成果を見るならば、インターフェースを一切認めないことは、常識的ではない。彼によれば、知覚についての機能的な説明をしていくことによって、つまり、リベラルな機能主義によって、常識的な見解を維持しつつ、懐疑論的な心配に答えていくことができる。

一つ目の論拠は、もっともである。確かに、選言説論者が考えているように、先に述べたような厳密な集合を確定できるという意味での科学的な根拠は現在ないだろう。しかし、そのことは、厳密な集合が将来見つかるということを否定しない。さらに言うならば、そのことは、厳密な集合の確定ではない同一性が示される可能性を否定するものでもない。厳密な集合の確定にこだわらないならば、経験の現象的特徴と脳状態や脳の出来事が付随しているということに関する証拠はたくさんある[62]。少なくとも、現時点の状況では、選言説論者の主張を、想定から確定に変えることはできない。

二つ目の論拠に関しては、記述がその経験の現象的特徴を尽くしていると考えるべきかどうかという点が重要である。晩年の Putnam は、われわれの言語による報告だけで、経験の現象的特徴を尽くせるとは考えていない。そのことを主張するために彼が反例として提出している事例は、われわれの日常においてありふれた常識的な出来事である。つまり、普通の視覚を持つ人と乱視の人では同じ対象が異なる見えを持ったり、白い表面を見るとき左目を閉じて見るときと右目を閉じて見るときでは少し違った見えであったりするということを、われわれは日常的に経験している。問題は、そのことが、公共の質についての記述がその経験の現象的特徴を尽くしているという選言説論者の主張を覆すものになるかということである。選言説論者であるならば、覆すものになるとは限らない。なぜなら、選言説論者は、外的対象が何であるかを決定するようなインターフェースを考えないので、それぞれが同じ普通の視覚を持つ A さんも、乱視の B さんのも、同じ外的対象を見ていると考えるだけでよい。Putnam が言っていたように、問題が生じるのは、「現象的な特徴の内的な神経心理学的状態への付随性」を認めたうえで、「現象の外的性質への付随性」を認める場合である。もちろん、その場合、「現象的な特徴の内的な神経心理学的状態への付随性」を捨てることもできる。しかし、現代の神経科学的な説明を常識的なものとしても認めたいならば、たとえ厳密な集合を確定できるという意味で現象的特徴と脳状態の同一が言えないとしても、「現象的特徴の内的な神経心理学的状態への付随性」を認めないことは不適切に思える。そして、このような弱い意味での「現象的特徴の内的な神経心理学的状態への付随性」を認めるだけで二つの付随性の矛盾は、生じる。だとしたら、「現象の外的性質への付随性」を主張する点で、選言説論者は間違っているという Putnam の指摘は妥当である。

三つ目の論拠に関しては、リベラルな機能主義によっ

て、常識的な見解を維持しつつ、懐疑論的な心配に答えていくことが本当にできるのかが問題である。Putnamは、できると考えていた。人間や人間の言語的環境、非言語的環境、広い意味での「機能的」状態を含む志向的な相互作用によって、つまり、「長い腕」を持つ機能によって、われわれの知覚を説明するならば、われわれが外的な実在にアクセスできること、われわれの信念が世界についての内容を持ちうることを説明できるのであった。そのように考えるならば、私の環境にある対象や起こっていることを私と結びつけることができるのであった。確かに、以上のようなリベラルな機能主義を考えるならば、われわれの内的な脳状態と外界を結びつけるという懐疑論的な問題は解決されるかもしれない。しかし、それだけであるならば、わざわざ選言説を否定し、インターフェースの存在を主張する必要はないのではないか。事実、McDowellがすべての経験を概念化するものとみなしていることが選言説と結びついているということをPutnamは認めていた。にもかかわらず、Putnamは、選言説を否定していた。なぜ、彼はそのようなことができたのか。それは、彼が、何らかのものに気づくこと、統覚が、広い意味での機能的状態を含む相互作用によって、外界とのアクセスを保証することができると考える一方で、知覚的経験のすべてが統覚である訳ではないとしていたからである。彼は、統覚以外のクオリアを認めていた。そして、そのことによって、インターフェースを認めないという主張における非常識的な見解を排除していたのである。以上のように考えるならば、リベラルな機能主義によって、常識的な見解を維持しつつ、懐疑論に答えるという課題は、Putnamによってうまく答えられている。

これまで検討してきたところでは、パトナムの選言説への批判は、おおむね妥当だった。そして、選言説を否定し、リベラルな自然主義、リベラルな機能主義によって、科学的世界観と常識の世界観の和解をはかることができるように思えた。しかし、本当にそれでよいのだろうか。

一つ目の問題は、知覚的経験から統覚をとったものは、そもそも、何のために考える必要があるのかということである。““Naïve Realism” and Qualia”（2016）において、Putnamは、その問題に、「クオリア自体は、たとえば、木やウサギと同様に、知覚的経験の対象になることができる」[63]と答えている。インターフェースが認識論的役割を果たせると考えていることが、間違いだったのである。しかし、そのようなものとしてインターフェースを認めることの哲学的な意義はなんだろうか。古典的経験論においては、インターフェースはわれわれの何を知りうるのかを考えるための認識論的役割を果たしていた。そこでインターフェースを考えることは、たとえうまくいかなかったとしても、哲学的に知識を説明するためには必要だった。しかし、単にインターフェースが、木の存在と同じようなものだと考えられているとしたら、それは、常識的な見解と矛盾しないということ以外でどんな働きをなすことができるのだろうか。

二つ目の問題は、一つ目の問題と密接に関係している。確かに、本論文で見てきたPutnamの見解は、科学的世界観と常識の世界観を同時に受け入れることができるような実在論を提示している。たとえば、それは、選言説を否定することによって、われわれが日常でも影響を受けている脳神経科学的な説明も、われわれが日常生活において考えている、われわれの心の中にある像も両方とも認めることができるようになっている。われわれは、われわれの生活を豊かにする科学に信頼をおきながら、われわれの日常における自然な考え方も維持することができる。けれども、それは、ただ単に日常に戻ることであって、たとえば、知識に関して何らかの哲学的見解を示すものではないのではないか。Putnamは、知覚の問題を考えるために、知覚心理学や発達生物学、神経科学、行動科学等のさまざまな科学的探究と哲学的分析は協力する必要があると言っていた。しかし、そこで、哲学的分析が果たすべき役割は何なのだろうか。リベラルな自然主義、リベラルな機能主義という考えが、科学的世界観と常識の世界観を同時に受け入れることができるような実在論を求めるという目的にとって非常に魅力的であるからこそ、そのような考えを受け入れたときに、知識や実在に関するさまざまな探求における哲学的分析の役割をどのように考えるかが検討されなければならないだろう。

8．おわりに

本論では、科学的世界観と常識の世界観の両立をめざすものとしての「リベラルな自然主義」、「リベラルな機能主義」というPutnamの考えの妥当性を、その選言説批判に焦点を当てて、考察してきた。そして、科学的世界観と常識の世界観を同時に受け入れることができるような実在論を主張するという前提に基づくならば、Putnamの選言説批判は適切であり、「リベラルな自然主義」、「リベラルな機能主義」によって、科学に対する反実在論を伴わない常識の実在論を主張できることを確認した。そして、にもかかわらず、そのような立場を主

張するためには、知識や実在に関するさまざまな探求における哲学的分析の役割をどのように考えるかという問題が解決されなければならないということを指摘した。その問題を考えるためには、統覚についての Putnam の考えや彼の McDowell に対する批判を検討することが役に立つ。それらに関しては、今後の課題である。

注

[1] "Hilary Putnam". Encyclopedia Britannica. https://www.britannica.com/biography/Hilary-Putnam (accessed 2017-9-22). 参照。

[2] 横山幹子．知識と実在論：パトナムの場合．図書館メディア研究2003．vol.1，no.1，2003，p.11-22.

[3] *Ibid*. p.12. デューイレクチャーとは、1994年3月22･24･29日に、コロンビア大学で Putnam が行った講演である。

[4] たとえば Putnam, H. "Intellectual Autobiography of Hilary Putnam"(2009). Auxier, R.; Anderson, D. ed. *The Philosophy of Hilary Putnam*. Chicago, Illinois, Open Court Publishing Company, 2015. p. 3-110. 参照。

[5] *Ibid*.p.91. 強調は原著者。以下同様。

[6] De Caro, M.; Macarthur, D. "Introduction: Hilary Putnam: Artisanal Polymath of Philosophy". *Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 1-35.

[7] *Ibid*. p.10.

[8] De Caro, M. "Introduction: Putnam's Philosophy and Metaphilosophy". De Caro, M. ed. *Naturalism, Realism, and Normativity*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 1-18.

[9] *Ibid*. p.3. ここでの「常識の世界観」は、「日常生活でわれわれが普通に認めている世界観」であると考えられる。

[10] ロイスレクチャーとは、1997年11月3･5･7日のブラウン大学での Putnam の講演である。

[11] Putnam, H. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999.（Putnam, H.（野本和幸監訳）心・身体・世界：三つの撚り糸／自然な実在論 . 東京 , 法政大学出版局，2005.）

[12] ここでの「リベラル」は、「政治的にリベラルな」という意味では使われていない。「リベラル」という形容詞がつけられているのは、「狭い機能主義」や「狭い自然主義」ではなく、「広い意味での機能主義」、「広い意味での自然主義」という趣旨だと考えられる。「リベラルな機能主義」、「リベラルな自然主義」の具体的な説明（機能主義、自然主義の説明も含む）、「リベラルな」と「狭い」の違いは、それぞれ、第四章と第五章で詳しく述べる。

[13] Clark, P.; Hale, B. ed. *Reading Putnam*. Cambridge, Massachusetts; Oxford, Blackwell Publishers, 1994.

[14] 竹尾治一郎．パトナムの実在論．関西大学文学論集．Vol. 31，no. 2，1981，p. 33-50.

[15] 松本俊吉．ヒラリー・パトナムの「内在的実在論」についての一考察 . 東海大学文明研究所紀要．Vol. 20，2000，p. 1-16.

[16] 中村正利．大切なものは目に見えないか？：パトナムの形而上学的実在論批判．哲学・思想論叢．Vol. 18，2000，p. 11-22.

[17] 大谷弘．パトナムの自然な実在論とは何か．東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集．Vol. 23，2004，p. 331-344.

[18] 横山（中村）幹子．「自然な実在論」について．科学基礎論研究 . vol. 23, no. 2, 1996, p. 91-96.

[19] 横山幹子．合理的受容可能性と真理．科学基礎論研究．vol. 35, no. 1, 2007, p. 1-9.

[20] Putnam, H. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. p. 4.

[21] *Ibid*. p. 5.

[22] 横山幹子．合理的受容可能性と真理．p.1.

[23] Putnam, H. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. p. 10.

[24] *Ibid*. p.129.

[25] *Ibid*. p.130.

[26] *Ibid*. p.129.

[27] *Ibid*. p.130-131. 参照。

[28] *Ibid*. p.30-38. 参照。

[29] Putnam, H. "Perception without Sense Data" (2012). De Caro, M. ed. *Naturalism, Realism, and Normativity*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 152-168.

[30] *Ibid*. p.165-166.（）内著者。われわれの心的な働きや信念や概念から独立した現実の世界があること、その世界についての真理が検証可能性を超えているということを信じていることを、パトナムは「形而上学的」と考えている。

[31] Putnam, H. "On Not Writing Off Scientific Realism" (2010). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. *Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism*.

Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 91–108.

[32] *Ibid*. p. 101.「連言」とは、ここでは「A かつ B」という形の主張全体を言う。連言は A と B が共に真であるときにのみ真である。

[33] Putnam, H. "Naturalism, Realism, and Normativity" (2015). De Caro, M. ed. *Naturalism, Realism, and Normativity*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 21–43.

[34] *Ibid*. p. 24.

[35] Putnam, H. "Perception without Sense Data". p. 154.

[36] Putnam, H. "From Quantum Mechanics to Ethics and Back Again" (2012). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. *Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. p. 51–71.

[37] *Ibid*. p. 62. 、Putnam, H. "Intellectual Autobiography of Hilary Putnam". p. 84–85.

[38] De Caro, M. "Introduction: Putnam's Philosophy and Metaphilosophy". p. 11–15.

[39] Putnam, H. "Naturalism, Realism, and Normativity". P.22.

[40] *Ibid*. p. 24.

[41] Putnam, H. "Corresponding with Reality" (2011). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. *Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 72–90.

[42] Putnam, H. "Functionalism: Cognitive Science or Science Fiction?" (1997). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. *Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 608–623. 当時の Putnam は、リベラルな機能主義を主張しているわけではないが、しかし、そこでの考えの中に、かつての機能主義についてどう判断していたかを見ることはできる。

[43] Putnam, H. "Sensation and Apperception" (2012). De Caro, M. ed. *Naturalism, Realism, and Normativity*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 139–151.

[44] Putnam, H. "Replay to John McDowell". Auxier, R.; Anderson, D. ed. *The Philosophy of Hilary Putnam*. Chicago, Illinois, Open Court Publishing Company, 2015, p. 659–668.

[45] Putnam, H. ""Naïve Realism" and Qualia". De Caro, M. ed. *Naturalism, Realism, and Normativity*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 169–196.

[46] Putnam, H. "Corresponding with Reality". p. 73.

[47] Putnam, H. "Functionalism: Cognitive Science or Science Fiction?". P. 610.

[48] Putnam, H. "The Meaning of "Meaning"". *Mind, Language and Reality*. Cambridge, Cambridge University Press, 1975. (Philosophical Papers, Volume 2). p. 215–271.

[49] Putnam, H. "Corresponding with Reality". p. 88.

[50] Putnam, H. "Replay to John McDowell". p. 663–664.「統覚」という言葉は、カントの認識論と結びついている言葉である。そして、そのような「統覚」は「概念化すること」と密接に関係している。パトナムによれば、McDowell は、カント的懐疑論（人の考えがそもそも内容を持つという可能性についての懐疑論）に答えようと、知覚的経験を感覚受容器における概念的能力の現実化だと考えている。しかし、晩年の Putnam は、そのような考え（すべての知覚的経験が統覚だという考え）に反対する。そして、そのことが後述する選言説批判につながっている。

[51] Putnam, H. ""Naïve Realism" and Qualia". p. 194.

[52] Putnam, H. "How to Be a Sophisticated "Naïve Realist"" (2011). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. *Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism*. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 624–639.

[53] ここで言われている「公共の質」は、「外的な対象の持っている質」を意図している。それは、内的なものと考えられている「クオリア」と同じではない。

[54] Putnam, H. "How to Be a Sophisticated "Naïve Realist"". p. 632.

[55] Block, N. Inverted Earth. *Philosophical Perspectives*. Vol. 4, 1990, p. 53–79.

[56] McDowell がすべての経験を概念化するものとみなしていることは、選言説と結びついている。そして、McDowell の影響を受けて、Putnam はかつて選言説に共感していた。晩年、Putnam は、McDowell が懐疑論を避けるために、すべての経験を概念化するものとみなしていることを批判している。その議論はとても興味深いものであるが、ここでは、選言説批判一般に注意を向け、その問題については今後の課題としたい。

[57] Putnam, H. “Perception without Sense Data”. p. 156.

[58] Putnam, H. “Intellectual Autobiography of Hilary Putnam”. p. 96.

[59] *Ibid.*

[60] *Ibid.*

[61] 池上嘉彦 . 記号論への招待 . 東京 , 岩波書店 , 1984. 参照。

[62] たとえば、Zeki, S. A Century of Cerebral Achromatopsia. Brain. Vol. 113, 1990, p.1721-1777. 参照。

[63] Putnam, H. “ “Naïve Realism” and Qualia”. p. 195.

参考文献

Auxier, R.; Anderson, D. ed. The Philosophy of Hilary Putnam. Chicago, Illinois, Open Court Publishing Company, 2015.

Block, N. Inverted Earth. Philosophical Perspectives. Vol. 4, 1990, p. 53-79.

Clark, P.; Hale, B. ed. Reading Putnam. Cambridge, Massachusetts; Oxford, Blackwell Publishers, 1994.

De Caro, M.; Macarthur, D. “Introduction: Hilary Putnam: Artisanal Polymath of Philosophy”. De Caro, M.; Macarthur, D. ed. Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 1-35.

De Caro, M. “Introduction: Putnam's Philosophy and Metaphilosophy”. De Caro, M. ed. Naturalism, Realism, and Normativity. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 1-18.

松本俊吉．ヒラリー・パトナムの「内在的実在論」についての一考察 . 東海大学文明研究所紀要．Vol. 20, 2000, p. 1-16.

中村正利．大切なものは目に見えないか？：パトナムの形而上学的実在論批判．　哲学・思想論叢．Vol. 18, 2000, p. 11-22.

大谷弘．パトナムの自然な実在論とは何か . 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集．Vol. 23, 2004, p. 331-344.

Putnam, H. Mind, Language and Reality. Cambridge, Cambridge University Press, 1975. (Philosophical Papers, Volume 2).

Putnam, H. “The Meaning of “Meaning”. Mind, Language and Reality. Cambridge, Cambridge University Press, 1975. (Philosophical Papers, Volume 2). p. 215-271.

Putnam, H. The Threefold Cord: Mind, Body, and World. New York, Columbia University Press, 1999. (Putnam, H.（野本和幸監訳）心・身体・世界：三つの撚り糸／自然な実在論．東京，法政大学出版局，2005.)

Putnam, H. (De Caro, M.; Macarthur, D. ed.) Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012.

Putnam, H. “Functionalism: Cognitive Science or Science Fiction?” (1997). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 608-623.

Putnam, H. “On Not Writing Off Scientific Realism” (2010). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 91-108.

Putnam, H. “Corresponding with Reality” (2011). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 72-90.

Putnam, H. “How to Be a Sophisticated “Naïve Realist” (2011). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. P. 624-639.

Putnam, H. “From Quantum Mechanics to Ethics and Back Again” (2012). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2012. p. 51-71.

Putnam, H. “Intellectual Autobiography of Hilary Putnam” (2009). Auxier, R.; Anderson, D. ed. The Philosophy of Hilary Putnam. Chicago, Illinois, Open Court Publishing Company, 2015, p. 3-110.

Putnam, H. “Replay to John McDowell”. Auxier, R.; Anderson, D. ed. The Philosophy of Hilary Putnam. Chicago, Illinois, Open Court Publishing Company, 2015, p. 659-668.

Putnam, H. (De Caro, M. ed.) Naturalism, Realism, and Normativity. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016.

Putnam, H. “Sensation and Apperception” (2012). De Caro, M. ed. Naturalism, Realism, and Normativity. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 139–151.

Putnam, H. “Perception without Sense Data” (2012). De Caro, M. ed. Naturalism, Realism, and Normativity. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 152–168.

Putnam, H. “Naturalism, Realism, and Normativity” (2015). De Caro, M. ed. Naturalism, Realism, and Normativity. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 21–43.

Putnam, H. ““Naïve Realism” and Qualia” . De Caro, M. ed. Naturalism, Realism, and Normativity. Cambridge, Massachusetts; London, England, Harvard University Press, 2016, p. 169–196.

池上嘉彦．記号論への招待．東京，岩波書店，1984.

竹尾治一郎．パトナムの実在論．関西大学文学論集．Vol. 31，no. 2，1981，p. 33–50.

横山（中村）幹子.「自然な実在論」について．科学基礎論研究．vol. 23，no. 2，1996，p. 91–96.

横山幹子．知識と実在論：パトナムの場合．図書館メディア研究2003．vol. 1，no. 1，2003，p.11–22.

横山幹子 . 合理的受容可能性と真理．科学基礎論研究．vol. 35，no. 1，2007，p. 1–9.

Zeki, S. A Century of Cerebral Achromatopsia. Brain. Vol. 113, 1990, p.1721–1777.

“Hilary Putnam”. Encyclopedia Britannica. https://www.britannica.com/biography/Hilary-Putnam (accessed 2017–9–22).

（平成29年 9 月28日受付）
（平成30年 1 月 5 日採録）